

介護老人保健施設しおん

症例概要 利用者 : 男性・80代後半 要介護3

利用期間 : R5年2月から現在も利用中

経過 : R4年10月 食欲不振、排便困難によりA病院受診し末期の大腸がんと診断。肛門付近にカテーテル留置し排便は可能になったが、余命6ヶ月の宣告を受ける。

ご本人は家に帰りたいとの希望があったが、妻が介護を拒否した為、施設入所となった。

内 容

食欲不振、排便困難の為、病院受診したが、末期の大腸がんと診断される。

ご本人は「癌の家系なので自分も癌になる」と昔からと考えており、「手術は絶対にしない」と余命半年の宣告を受けいれ退院となった。

元々頑固で人のいう事を聞かないわがままな性格の為、妻からも「夫の介護をすると具合が悪くなるので家での介護はできない」と訴えがあり、しおん入所となりました。

しおん入所後は「ヤキが回った」「もう自分の好きにさせてくれ。」と自暴自棄になり、常に語気を荒げ、リハビリや介護を受け入れようとはしなかった。

しかし介護や看護、リハビリ職員が傾聴に時間をこまめにとり、ご利用者との距離を縮めて行くことで徐々に言葉を荒げる事が少なくなりました。

他のご利用者と一緒にリビングでの談笑、屋外散歩やレクに参加してくれるなどして徐々に心が穏やかな生活を送れるようになった。

日常生活を送るある日、ご家族から届いたひ孫の写真を大事そうに眺めながら「ひ孫に会いたい、日和山の桜を見たい」「歩けねえがらなあ」と寂しそうな表情をみせていました。

職員から「もうすぐ桜の季節だから、日和山へ行けるように頑張りましょう」と励ましを受けてから離床、臥床時の協力動作や車いす自操練習に積極的に取り組むようになりました。自身の暴言や頑固な振る舞いから家族との面会制限中ではあったが、心が落ち着いてきた事の知らせを受けた孫、ひ孫とも面会が叶いました。自信がついてきたのか花見にも参加したいと話され、日和山の花見ドライブに参加する事もできました。花見ドライブでは日和山の青空の下、満開の桜を見上げ「来年もまたこの空を見にく



る。」と力強く仰っていました。